

衣笠会館の棟札 —藤村家洋館についての歴史的検証—

Discovery of Kinugasa Kaikan's "Munafuda": A Historical Proof of the Western-Style Fujimura-House

清瀬みさを

要 旨

平成17年に登録有形文化財（建築物）〈第26-0199号〉として国に登録された明治末期の煉瓦建築である衣笠会館（旧藤村岩次郎邸）は、今まで設計者、施工者、竣工年、建物の当初の用途に関して確かな情報が得られないまま、「明治期の希少な和洋折衷の煉瓦住宅建築の遺構」¹という評価がなされてきた。しかし、論者は、明治40年前後の日本人の住文化を念頭におき、京都綿ネル株式会社を経営する実業家であった藤村岩次郎氏の職業や経済力、家族構成、敷地における会館の位置、建物の形状から推して、住宅建築にはあたらないと考えてきた。そこで、藤村家への聞き取り調査、古写真などの検証、京都綿ネル株式会社の本社屋建築との比較、衣笠会館の棟札発見、改修箇所の検証とこの時代の建築事情、住文化などを総合して衣笠会館の本来の機能と作者に迫ろうと試みた。

最大の成果は、棟札発見によって、従来不詳であった設計、施工者について、請負人と記された棟梁・鈴鹿彌惣吉が施工し、上棟式が明治37年10月11日であるという新しい知見をえたことである。またこの建物の古写真、改修箇所の比較検証から当初は館内すべてが洋間のみであり、現状の2階四室の和室のうち3室は大正末期から昭和初期、残りの1室は昭和40年代後半に改修されたと判断された。そして、藤村家への聞き取り調査からは、施主が造営した当初は、母屋としての木造平屋の和館、木造平屋建の洋館1棟、煉瓦造2階建の洋館1棟（衣笠会館）、茶室、蔵4棟の建造物からなる屋敷全体の構成も判明した。この建物の機能としては、従来の定説であった住居としてではなく、当時のお屋敷建築の定石である接客スペースとしての洋館であるが、一条通に面した表門から入ったすぐの位置にあること、施主の職場が会社ではなかったこと、和館の母屋、敷地奥の奥座敷としての洋館の存在と総合して判断するならば、「表屋」的な、つまり事務所棟としての機能を担う建物であったという結論を導いた。

キーワード

日本語 日本文化 美術史 建築史

1 はじめに

本論は、平成17年11月10日付で国登録有形文化財（建築物）（第26-0199号）に登録された衣笠会館（京都市北区北野下白梅町29番地、旧藤村岩次郎邸 図1-1、1-2）の竣工年、設計者、施工者、建物の当初の用途に関する歴史的な検証を目的とする。



図1-1 衣笠会館 煉瓦造2階建 正面外観



図1-2 衣笠会館 煉瓦造2階建 西面外観

平成17年12月5日、小坂憲次文部科学大臣名で発行された文化財登録証には「衣笠会館1棟 煉瓦造2階建、瓦葺、建築面積138㎡」とのみ記載されている。従来、この建物は、国内ではきわめて希少な煉瓦造住宅建築の事例として評価されてきた。イギリス人建築家の関与もとりざたされてきたが、設計・施工者については不詳のまま、明治38（1905）年頃に竣工した藤村氏の住宅、という紹介しかなされてこなかった。

しかし論者は、明治40年前後の日本人の住文化が木造和風であったことを念頭におき、また実業家であった藤村岩次郎氏の職業や経済力、家族構成、敷地における会館の位置、建築様式、規模から藤村家の「住宅」とするには無理があると感じてきた。そこで、平成19年の8月、近代建築の現地調査の一環で衣笠会館を訪れ、現所有者である財団法人衣笠会繊維研究所、ついで藤村家から複数回の聞き取り調査を行った²。さらに、同研究所のご協力を仰ぎ、同年11月29日、京都市文化財保護課技師・石川祐一氏立会のもと、会館の屋根裏調査を実施した。その結果、棟札（図2-1、2-2）が発見されたほか、天井裏の改



図2-1、2 棟札発見、棟札裏面

造の跡が確認された。平成20年1月10日、同財団の衣笠会講演会にて一連の調査から得られた知見を中間報告として発表した³。本論は、その調査以降の考察内容を加えて衣笠会館の歴史的検証を試みる。

本論では、以下の手続きで考察を進める。まず、関連資料、藤村家からの聞き取りをもとに衣笠会館の立地、施主・藤村岩次郎の事業、生活様式、屋敷の構成などについて基本情報を再確認する。ついで、日本近代建築史の流れにおける明治末期の日本の住文化と住宅建築の対応関係、とりわけ「お屋敷」の敷地内での和館と洋館の併存とその用途について概観する。さらに、明治期の煉瓦建築の様式と機能、衣笠会館の特質について考察する。そして、屋根裏調査で発見された棟札および藤村家への聞き取り調査、同家所蔵になる写真資料等から設計・施工者、竣工年、竣工当初の形状、屋敷全体の建造物との関連から衣笠会館の歴史的再評価を試みる。

2 衣笠会館と北野白梅町界隈

2-1 衣笠会館の現状

衣笠会館は、西大路一条から西に入った京都市北区北野下白梅町29番地に立地する。赤煉瓦の明治建築で、明治末期に京都屈指の機業家⁴・藤村岩太郎によって普請された。もとは、3500余坪の広大な敷地の一角を占めていたが、屋敷の中で残るのは、この煉瓦造2階建ての建築物および付属棟と庭園の一部のみである。昭和25(1950)年に敷地の東側約600坪が京都工芸繊維大学の所有に帰して以来、衣笠会館と呼ばれ、同窓会館、外人教員宿舎を経て、現在は、財団法人衣笠会繊維研究所として機能している⁵。

衣笠会館は、南北に長い矩形のプラン、総2階建てで屋根は瓦葺きの寄棟造で南よりに2基の煙突が突きだしている。南面の中央にある玄関は一条通りの表門に向いている。外観は写真に示すように、凹凸もなく、極めて簡潔なデザインである。改修の跡があるということで、当初の玄関の形式は分からないが、壁面は北面を除き、1階、2階とも同じ形の楕円形アーチが整然と並び、軒下の歯飾り装飾のみが僅かなアクセントを添えている。北面2階では、西側に他の窓3つ分の大アーチ窓、東側にふたつ分の中アーチ窓がある。いずれのアーチ窓にも、銅版葺きの軒が設置されて

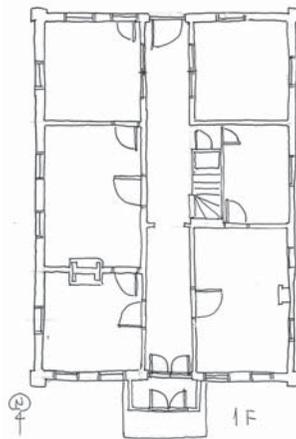


図3-1 1階平面図

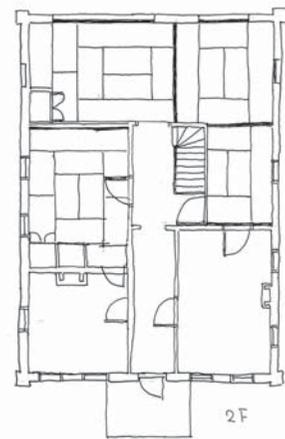


図3-2 2階平面図

いる。西面では2階北端のアーチ窓が煉瓦で塞がれている。館内に入ると、玄関はファンライト⁶からの採光で明るく、靴脱ぎから床が高くなっている。当初から土足で上がる仕様ではない。玄関から付属棟の奥まで北に一直線の廊下が伸び、1階2階とも中央の廊下を軸に左右対称に部屋を分かっている。1階は洋間が三室ずつ、2階は洋間2室と和室が四室の間取りになっている（図3-1、3-2）。洋間には、部屋ごとに趣向の異なる大理石のマントルピースに囲われた暖炉があり、天井には漆喰細工の照明飾りが施されている。階段は廊下のなかほどに、目立たなく隠れて狭い。

2-2 衣笠村の宅地開発と藤村岩次郎

ここで、衣笠会館の建設当初の立地をイメージしておきたい。現在の北野白梅町界隈は、西大路通、今出川通、京福電鉄北野線が交差する京都市街地西の要衝である。街並みは、この界隈から嵐山まで途切れ目無く続く（図4）。しかし、幕末にまで遡ると、地図は全く別世界を示している（図5）⁷。会館の現在地は、丸で囲った「因州屋舗」と記された因幡池田屋敷の地図に重なる。黒く太い線で示された御土居を越えると、すぐ東に平安京造営にともなって創建された陰陽道の社・大將軍堂が位置し、現在に至るまで大内裏の北西角の天門を厄災から守っている。衣笠会館竣工当初も、ここは依然として西山まで広がる田地の一隅であり、明治22（1889）年市制・町村制施行以降、大正7（1918）年4月に京都市上京区に組み入れられるまでは、この地は京都府葛野郡衣笠村と称していた。また、現在の京福電鉄北野線は、季節を問わず修学旅行者や国内外の観光客を満載しているが、北野白梅町 - 高雄口（現宇多野）間が開設されるのは大正14年のことである⁸。さらに、市域西端の南北幹線道路である西大路通も、都市計画道路として昭和14（1939）年に開設されたにすぎない。



図4 北野白梅町一円の現在

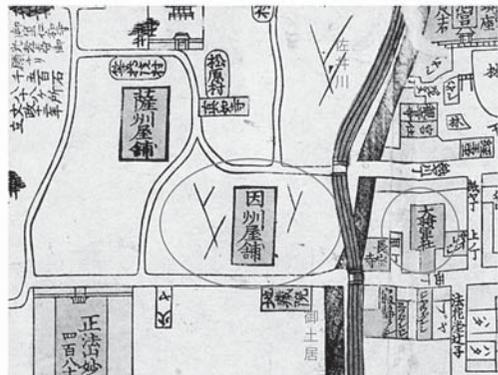


図5 改正京町御絵図細見大成
慶応4（1868）年

しかし、この衣笠村が大きな変貌を遂げたのは、衣笠会館の施主である実業家・藤村岩次郎がこの地に屋敷を構え、郊外住宅地「衣笠園」の経営に乗り出したときであっ

た⁹。明治40(1907)年前後は、我が国が殖産興業に成功し、都市の人口が過密になるに従い環境が悪化したために、郊外住宅地の開発が始まった時期である。宅地開発を行ったのは不動産業者だけではなく、経営母体、規模、経営方針はさまざまであった¹⁰。関西における大規模な宅地開発の事例としては、阪神電鉄(阪神電気鉄道)による明治42(1909)年の西宮、翌年の鳴尾、阪急電鉄(箕面有馬電気軌道)による明治43(1910)年の池田室町などが挙げられる¹¹。

京都市内においても市域拡大の時期にあたり、宅地開発も活況を呈していた。大正末期の土地会社は約20にのぼる。現在、市内きっての高級住宅地となった左京区北白川小倉町は、明治40(1907)年、繊維産業で財をなした藤井善助(明治6:1873-昭和38:1943年)によって開発された¹²。関西近代の経済的發展は糸偏産業によるところ大であり、斯界で財をなした藤村岩次郎もそのような時流に乗って宅地開発に手を染めた人物であった。

藤村は、衣笠村各地に約8500坪の土地を購入し、明治末(1912)年、自分の屋敷近くの一町田の4200坪に賃貸住宅「衣笠園」を開設した。一軒あたり100坪から150坪の敷地に30から60坪の建築面積の一戸建住宅を建設し賃貸とする経営方式で、入居戸数は最大時で40軒を数えた。衣笠園は、東は佐井川、北は小松原の農地、南は一条通りに画された風光明媚な環境であることから、土田麦遷(明治20:1887年-昭和11:1936年)をはじめとする芸術家が多く好んで住まい、「画描き村」と称せられる地になった¹³。そして大正中期から昭和初期にかけては大將軍撮影所を中心とする映画村として活況を呈し、より広い立地条件のために太秦に移転するまで映画人が密集した地ともなった。藤村氏は寒村であった衣笠村に文化ゾーンとしての性格を与えた人物であり、藤村氏の屋敷はその中心であった。

2-3 企業家・藤村岩次郎

ここで衣笠園の経営者・藤村の事業母体と家族構成について触れておきたい。藤村岩次郎は、安政5(1859)年、伏見の米穀薪炭商を営む藤村岩衛門の子として京都市に生まれた。父の代から綿織物を扱うようになり、明治21(1888)年、三十歳を前に「藤村織布」を興した。明治28(1895)年には、西陣の綿ネル¹⁴業者らとともに、資本金50万円を持ち寄り、「五二会京都綿ネル株式会社」を創設している(図6)¹⁵。「五二



図6 京都綿ネル株式会社始業式記念写真
前列左から4人目が藤村岩次郎

会」とは、農商務省次官・前田正名（嘉永3：1850－大正10：1921年）が産業振興・輸出奨励のために組織した全国組織の名称で、「五二」の数字は、織物、陶磁器、漆器、金属器、製紙の五品目に雑貨と敷物の二つを意味する。西陣の機業界は、五二会に加盟し、国外に対しては綿製品の輸入を食い止め、国内では紀州の手織り綿ネルに対抗して機械織り、機械捺染といった新しい技術を導入して一大シェアを占有した。京都では、綿ネル会社が次々に立ち上がり、維新直後の没落から立ち直る機運を掴んだ。

五二会京都綿ネル株式会社はそのような状況のなかで、天満織物株式会社の工場長・小林銀三を技術長に迎えて創業した。年長で地元の資産家である辻忠三郎が社長に就き、藤村は肩書きこそ専務取締役であるが、国内外に旺盛な活動を展開した。明治31（1898）年に京都工業会社同盟会が政府に工場法案反対の請願書を書き送った際にも、明治33（1900）年の京都商業会議所による欧米視察にも京都糸偏業界の中心人物として活躍している¹⁶。

京都綿ネル本社と工場は四条通千本西入に設置され、さらに伏見、西陣など市内四カ所に大工場を稼働し、斯界最大大手の会社となった（図7）。すべて煉瓦積みの建物である本社の施設は現在、日本写真印刷株式会社の所有になる¹⁷。その後、この会社は京都綿ネル、日本製布、辻紡績と名称を転じ、戦後はGHQのキャンプ、その後島津製作所時代を経た日本写真印刷の現敷地内には、旧本社屋、工場などが残る（以下京都綿ネルと表記する）。図8の写真奥の左手の角張った特徴的な煙突は現在も日本写真印刷の工場内に確認される。旧本社屋は平成20年に完全な修復を経て印刷記念館として新たな機能を得ている（図8）。

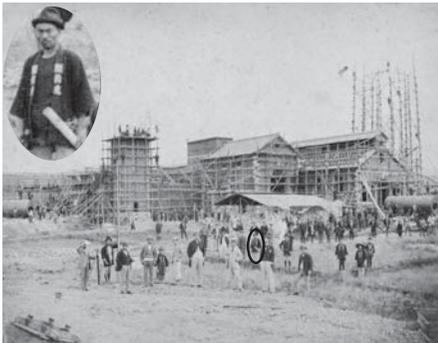


図7 京都綿ネル本社工場工事写真



図8 旧京都綿ネル株式会社本社屋
現日本写真印刷株式会社記念館

藤村岩次郎は、本来の機業、先に述べた衣笠園の不動産経営のほか京都の糸偏産業の振興のために尽力し、自動車の輸入も試みるなど大正4（1915）年5月に58歳で亡くなるまで精力的な活動をこなした。

2-4 藤村岩次郎の屋敷と家族

藤村は、衣笠園創設に先立ち、現在地を取得した敷地 3567 坪に屋敷を構え、市内から移り住んだ¹⁸。敷地内の建物の配置などについては、岩次郎の孫・故弘氏夫人の多賀子氏から聞き取り調査を行った (図 9)¹⁹。

一条通側は高い板塀で囲まれていた。門の位置は現在と変わらず、主要な建造物としては、門から入るとすぐ正面に洋館 (衣笠会館 図 1-1、1-2)、その西側、池と庭園をはさんで平屋の大きな和館、敷地の北端には蔵が並び²⁰、北東奥には平屋の木造洋風建築があったということであるが、現存するのは付属棟²¹を含む衣笠会館一棟のみである。残りの藤村家屋敷の建造物は平成 10 年、マンション建設に伴いすべて失われている。

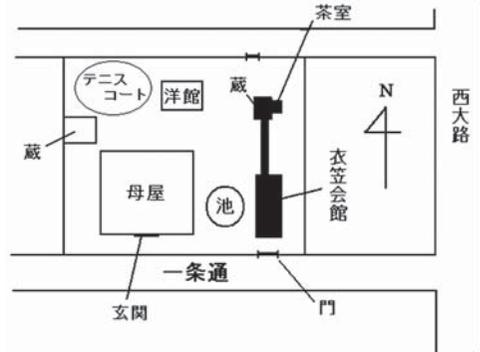


図 9 藤村邸敷地内建造物再構成図

和館と洋館ふたつの使い分けについては、岩次郎は終生家族揃って和館に居住したこと、長男の松雄氏に世代交代したあと、松雄氏が洋館を住まいにし、岩次郎未亡人は母屋に暮らしたこと、松雄氏の長男夫妻 (弘、多賀子夫妻) の家族は、敷地奥の木造平屋ではあるが「洋館らしい洋館」²²に起居したことがある、そして、その洋館には岩次郎がイタリアから持ち帰った大理石彫刻などがいくつも飾られていた、とのことであった。同家には、フィレンツェで彫らせた大理石彫刻の岩次郎像が所蔵されている。

衣笠会館を背景にした家族写真 (図 10) を見ると、岩次郎の母、岩次郎・ハル (昭和 29 年没) 夫妻、三男一女の子供たちと使用人も含め 23 名が写っている。記念写真ということであろうが、全員が着物姿で、女性はまだ日本髪を結っている。会館は西面と北面の端が見えているこ

とから、和館の母屋庭先で写している。写真中央に立つのが、上背のある恰幅のよい岩次郎である。京都綿ネル始業記念写真においても 22 名のうち洋装は写真中央に位置する岩次郎ほか 4 名のみで、車夫以外の会社関係者は紋付き袴の正装である (図 6)。また同家には藤村岩次郎が女優を連れ、車を三台連ねて嵐山に遊



図 10 藤村氏家族写真

ぶ写真が所蔵されているが、そこでも男性は全員洋装、女性は全員和装で日本髪を結っている。岩次郎本人は、度重ねて外遊し、ハイカラ好みであったとのことであるが、家庭に帰ると、家族ともども、和館に純和風の生活をしていたということであろう。

3 明治の洋館と衣笠会館

藤村多賀子氏からの聞き取りによると、衣笠会館は少なくとも、岩次郎一家の住まいとして建てられたのではなく、住まいは平屋の大きな和館であったという情報が得られた。ここであらためて、日本近代のお屋敷建築における和館と洋館の位置づけを確認し、藤村家の屋敷構成との比較検討から、衣笠会館が住まいとして建てられたのではないことの裏付けを試み、別の用途を類推する手がかりにしたい。

3-1 日本における洋館のはじまり

日本における洋風建築のはじまりは、明治5(1872)年に天皇が断髪し、完全に洋風の制式と日常生活に改めたことに始まる。天皇の行幸には洋風のお休み所が必要となり、まず皇族、旧大名、政財閥人の屋敷に、自分たちの居住空間としての和館、つまり木造の伝統建築とは別棟の洋館が建てられた。その最初期の事例としては、大阪・桜宮の造幣寮への行幸に備えて明治4(1871)年に建造された泉布館が挙げられる。お雇い外国人技師のウォートルス(Thomas James Waters, 1842-1898)の設計になる煉瓦・石造でベランダ・コロニアル様式の2階建てであった。造幣寮建造物の中に、ぼつねんと泉布館はたたずんでいた。しかも、幕末・維新にはウォートルスをはじめ、正統な建築科教育を受けた西洋人建築家など存在しなかった。彼らの建築にはどこかあやふやなところがあり、美観には問題があった²³。本格的な西洋建築についての情報が充実してくるにつけ、他のあらゆる分野と同じく、早急に正統な西洋建築を自在に設計できるような日本人建築家を育成する必要に迫られた。

明治10(1877)年、そのような要請に応じて帝国大学工部大学校造家学科(現東京大学建築学科)初代教授に着任したのがジョサイア・コンドル(Josiah Conder, 1852-1920)である。イギリス青年コンドルは、同世代の学生たちに、「建築は芸術である」という西洋流の芸術理念と西洋建築の歴史様式をたたき込んだ。そして、彼は、国家の顔となるような大建築は残さなかったが、明治17(1884)年の有栖川宮邸洋館を皮切りに、さまざまな様式の本格的な洋館を立ち上げていった²⁴。

とりわけ、後世の手本となった住宅建築は、明治29(1896)年の岩崎久弥茅町本邸である。ここにコンドルは、後の時代にまで影響力を保つ、日本におけるお屋敷建築の定式を作った。つまり、広大な敷地に、住居としての広い本造和館と応接空間としての洋館、茶室とビリヤード場との一揃えである。多数の使用人の住空間もあわせると和館はおびただしい部屋数と床面積である。それに対して応接を目的とする洋館の規模はよほど小さい。その洋館はコンドル以降、ルネサンス様式、バロック様式、チュー

ダー朝様式などさまざまであったが、立派な「作品」としての建築であり、煉瓦の構造をもつ場合でも必ず外壁に石を貼り、煉瓦をむきだしにしている事例はない²⁵。そして洋館は館内もすべて洋間であり、和洋折衷ではなかった。

藤村家屋敷の場合も、大きな平屋の和館、平屋木造の洋館、茶室が揃い、明治期におけるお屋敷建築の文法を踏まえていたことが確認される(図9)。ビリヤード場については、藤村家から情報は得られなかったが、岩次郎が渡航経験も豊富でハイカラ好みであったこと、テニスコート²⁶が設置されたことを考えるとビリヤード場が存在していた可能性は否定できない。しかし、竣工当初の衣笠会館内にビリヤード台が設置された可能性については、どの部屋も手狭にすぎると判断される。

表門を入った正面に位置し、お屋敷内に設置される迎賓的洋館建築の様式から外れる煉瓦建築・衣笠会館の建設目的に迫るために、以下、明治末期における日本人の住文化、煉瓦建築の用途などを概観しつつ会館との比較検討を行う。

3-2 明治末期の住文化と京都の洋館建築事情

ここでは現状の和洋折衷が施主岩次郎の意向によるものであるのか、明治期に希少な和洋折衷住宅という定説の妥当性について、住宅建築家像をも含めて時代考証をしておきたい。

明治後期になると、留学や仕事で欧米生活を体験する日本人は増えたにもかかわらず、また、屋敷内の洋館がどんどん増えていっても、洋装で椅子座のオフィスに働く勤め人は自宅に帰ると和服に着替え和館の畳で生活をした。また一方で、帝国大学のエリート建築家たちの使命は国家の顔となるような大建築であり、卒業設計には洋風の劇場や美術館、オペラハウスなどが選ばれた。彼らが住宅として認識するのは上流階級のお屋敷建築のことであり中流以下、庶民の住まいなど全く念頭にはなかった。卒業設計に庶民の住宅を取り上げるのはよほどの変人とされた²⁷。

官民あげて都市の環境悪化、庶民の住環境の劣悪さにより取り組み始めたのは日本が列強入りを果たした、大正時代のことである²⁸。大正末期からようやく都市環境の改善、国民の生活向上、生活様式の一元化・合理化、住宅や生活環境、家庭、庶民の住宅などが意識されるようになり、洋間の普及が推奨された。したがって、藤村岩次郎本人が何度も外遊しハイカラ好みであったとしても、先の家族写真に見る女性たちの和装と日本髪からも判断されるように、家族や使用人に洋風の住空間を設える発想はなかったはずである。また一方で、一般的に、住宅を建てるのは、「建築家」ではなく、大工であった。現代日本においても、作家的な建築家に自宅設計を依頼できる層は限られている。まして、図面を引いて建物を描く「建築家」は帝大を卒業した、ごく一握りのエリートの時代である。さらに、関西に建築家が育つのは、京都帝国大学に建築学科が設置された大正9(1920)年以降のことである。衣笠会館建設の明治末期の関西にはごくわずかな建築家しか存在しなかった。

衣笠会館の接客スペースとしての適正を考えるために、藤村岩次郎とほぼ同時期に同じ京都染織界に貢献した実業家・稲畑勝太郎（文久2：1862－昭和24：1949年）邸を挙げておきたい。稲畑が南禅寺の南に構えた屋敷内の和館（明治38：1905年）とその端に建てられた洋館（大正5：1916年）を比較するならば（図11）、この時代の実業家の屋敷における住空間としての和館と洋館のスケールの違いが歴然と理解されるであろう。稲畑邸洋館は、京都における最初期の建築家、そして京都大学工学部の建築学科初代教授となった武田五一（明治5－昭和13年）が設計している。洋館は木造2階建てで、分離派様式を交えた凝った外観をもち、内部はステンドグラス、天井画、壁画などなど、装飾も充実している。

この武田に関しては、京都市内に住宅建築を17件設計しているが、大正末期、昭和初期の鉄筋コンクリート2棟をのぞきすべて木造である²⁹。また、皇族や大財閥からの要請があり、コンドルおよびその門下生が並み居る東京とは異なり、京都市内においては、明治期から大正期に建造されたお屋敷内の洋館のほとんどすべてが木造建築であった。明治42（1909）年に国賓を招く本格的な贅を凝らした迎賓館として、煉瓦造石貼りで建造された長楽館³⁰は例外的な存在であるにせよ、衣笠会館の姿、形、室内は中途半端に思われる。

3-3 衣笠会館の和洋折衷

先にみたように、明治末期の洋館、住宅事情をふまえると、煉瓦造・和洋折衷の衣笠会館が住宅であったならば、いかにも「希少」とされることが理解される。ここで、館内の和洋折衷について検証しておきたい。先に、藤村家からの聞き取り調査で、施主・岩次郎の長男松雄氏が住まいとして利用したという情報を紹介した。松雄氏が30歳のころ、つまり大正末期、結婚を機に衣笠会館に住まいを母屋から移したということであった。大正末期における家庭生活の住環境は、まだ畳敷和室が基本である。

現在の2階和室4室のうち、西側中央の和室については、以前から改造がとりざたされていた³¹。この部屋の改造については、衣笠会館関係者の古老から情報が得られた。昭和40年代半ばに暖炉を撤去して押し入れに改造し、畳敷きにしたとのことであった。この和室は他の3室と同じ畳敷き、竿縁天井であるが、異なる点は、敷居が二重になり、



図11 旧稲畑勝太郎邸（何有荘）
和館の左端に洋館が位置する

畳が廊下より際立って高くなっていて改修が歴然としていることである。

残りの北3室については、竿縁天井、畳敷きで、三室の間には欄間がある。しかし、外部から見ると、北壁面2階では西からアーチ窓が3つ、そして残りふたつが大、中のアーチ窓に改造され、それぞれアーチの頭を出した状態で軒が造られている(図12-1、12-2)。また、西壁面北からひとつめのアーチが塞がれているが、先に示した家族写真(図10)では2階西北角のアーチ窓は西面、北面とも他と同じ形状で塞がれても改造されてもいない。さらに、現在、窓を塞いでいる煉瓦および北面2階の大、中アーチまわりの煉瓦は、大正14年以降の煉瓦である³²。

館内では廊下側から見ると、現在の引き戸の上には玄関2階上部と同じファンライトがあり、室内からは壁で塗り込められている。窓は、東がもとのアーチ窓、北はガラスの横長矩形・引き戸に変更され、軒から上のアーチ部分が明かり取りの窓として利用されている。そして、西面の塞がれたアーチ窓の位置には床の間が設置されている(図3-2、13)。竿縁天井は、洋間の天井折り上げ下部の位置にあるため、洋間より約40cm、低い。廊下からの引き戸のための建具は後付けであり、畳と建具の間に隙間があり、板で埋められていることから、もとは洋間であったと判断して無理はないであろう。東北2番目の小部屋については、現在も開き戸であることから、これら北奥の2室と北東の1室は、竣工当初には洋間であり、大学の所有になるより遥かに古い時期、松雄氏が住まいにするために大正末年から昭和初期に本格的な和室に改造されたと考えるのが自然ではないか。衣笠会館竣工当初は、従来言われてきたように和洋折衷ではなく、全館洋間、完全な洋館であったと考えてよい。



図12-1 会館北面



図12-2 2階北のアーチ改造部分



図13 2階北西和室現状

4 衣笠会館と煉瓦

衣笠会館は煉瓦造2階建の建築物であり、すでに、藤村岩次郎が住宅、すなわち母屋として建てられたのではないことを確認してきた。また、京都市内のお屋敷内の洋館は一般的に木造であることにも触れてきた。それでは、施主はどのような目的で、正門の正面に煉瓦の2階建てを造ったのであろうか。

あらためて館の装飾的要素を考察するならば、館内では、洋間の立派な大理石マントルピースの暖炉、洋間天井の照明飾りの漆喰レリーフ、外観では軒下の煉瓦歯飾り程度の簡素さが注目される。ここで、明治のトピックである煉瓦建築の中で会館がどのような用途の建築に近いのかを検証し、会館の竣工当初の用途に迫りたい。

4-1 衣笠会館と煉瓦

西洋から導入された煉瓦建築は、地震国の日本では幕末から明治いっぱい、わずか半世紀の文化に終わった。安価に製造できる建材である煉瓦は、殖産興業や軍事産業の現場に必要な不燃建築に適するために、また駅舎や高等教育機関、政庁舎、銀行など新たな文化にふさわしい器として採用された³³。しかし、明治中期には、煉瓦の積み方で強度に多少の違いがあるとしても、基本的に地震国には不向きであることが判明し、大正に入ると鉄筋コンクリート建築に置き換えられていった。

明治前半の日本人は、煉瓦を歓迎したのかどうか、とりわけ住環境として好んだのかどうか。明治5(1872)年、銀座で大火が生じた。その後、街路に面した建物を不燃建築にするために、ウォートルスの設計になる煉瓦長屋が建造された。「銀座煉瓦街」である。ところが、実際の入居希望者はそれほど多くはなかった。湿気の多い日本では煉瓦造建築は、必ずしも住環境に適さなかった。また明治中期に、東京市が幹線道路に面した建築物を不燃化するために、石積み、煉瓦積み、土蔵造りのいずれかを選ぶよう指導したときに、結局、伝統と実績をもつ土蔵造が選ばれた。川越市や長浜市の土蔵造りの家並みは実は、このような事情で選ばれた明治中期以降の建築である。

木造建築、畳文化が基本の日本人が外壁に煉瓦を隠す細工も施さず、そのまま住宅とする事例は希少であった。最初から煉瓦造の住宅建築であったことが確かな、ほとんど唯一の現存する例は、埼玉県本庄市銀座の芝崎邸(大正9:1920年)である。それだけに個人の屋敷内の煉瓦造住宅建築の例として衣笠会館が注目されてきたわけである。

4-2 煉瓦建築と美意識

また、壁体のみが煉瓦造りであっても、西洋では古典系の建築³⁴の場合には煉瓦は安価な材料であり美観を添えるために壁面は高価な化粧大理石や、モザイク、フレスコ画で覆われねばならなかった。日本でも明治28(1895)年に竣工した東京日本橋の日本銀行本店やお屋敷建築の洋館のように、記念碑的な意味をもつ、あるいは高級な

建物の場合、西洋の正統に倣い、煉瓦の躯体を西洋の白大理石に代わる我が国の白御影で覆った。先に挙げた京都の迎賓館・長楽館は石貼りであった。一方で、18世紀末のイギリスのゴシック・リバイバルをきっかけに、19世紀のドイツ表現主義、フランスの都市改造計画による建築ラッシュにおいて、煉瓦の色彩や表現効果を積極的に利用する傾向が生まれている。むしろ古典建築とは逆に壁体を覆う化粧材としての可能性が追求されるようになった。日本においては、辰野金吾（嘉永7：1854－大正8：1919年）による東京駅（大正3年）、日銀の地方支店群、片山東熊（嘉永6：1853－大正6：1917年）による京都国立博物館（明治28年）などは、確かに華やかで、芸術的な煉瓦の表現可能性を知悉した上での設計である。

衣笠会館は、最初から外壁の化粧仕上げをしていない。また、1階と2階の窓の形式を違えて変化を出す、化粧積みで模様を出すなど、煉瓦を芸術的な効果として用いている様子でもない。外観的に近いのは、たとえば茂庄五郎（文久3：1863－大正2：1913年）の設計になる旧尼崎紡績本社屋（明治33年、現・ユニチカ記念館、図14）など事務所建築ではなかろうか。ただし、衣笠会館は京都の町屋のように、玄関からウナギの寝床式に奥に深く、正面観と階段を華やかに見せる設えではない。改造前の姿は知られないが、玄関上2階のバルコニーの大きさからしても、玄関に車寄せがあったとは考えにくい。



図14 旧尼崎紡績本社屋

4-3 衣笠会館と旧京都綿ネル株式会社本社屋の比較

ここで、施主藤村が日常にどのような煉瓦建築を見ていたのか、また機能による形の違いを意識していたのかどうかを考えてみたい。そのために、藤村岩次郎の本拠である京都綿ネル株式会社の旧本社屋を取り上げ、構内の煉瓦造工場とどのように区別されているのか、またその特色を考察する。

現在、この本社屋は、日本写真印刷株式会社の印刷記念館（図8）として修復・再生された。竣工年、設計者ともに不詳とされてきたが、同社で修復のために調査が行われたときにも、やはり設計者・施工者の手がかりとなる棟札は発見できなかったということであった。工場については、先に挙げたこの建設現場記念写真（図8）裏面に明治30（1897）年6月8日とあったが、明治40年に発行された京都綿ネル株式会社記念写真帖の記載から、明治29年から31年にかけて建物・設備とも完成したことが確認

された。また本社屋については、平屋から建て替えて、明治39年12月に竣工したことが明記されていた。少なくとも、不詳の竣工年は明治39年12月であることが判明したが、個々の建築物・設備等の写真や詳細な記述があるにもかかわらず建築家についての記載は一切ない。特筆すべき著名な建築家の関与は考えにくいのではないか³⁵。

旧本社屋は、大規模な工場の本社屋にふさわしい堅牢な煉瓦造2階建てであり、正面には凝ったデザインのバルコニーを白御影の円柱が支える立派な玄関車寄せがある。そして、屋上には繊細なグリル（復元）、屋根窓、そして建設当初は外壁に化粧石張り、窓にアーチの縲型が施されていたことを併せると、格の高い古典様式を出来る限り試みたことが理解される。また、車寄せ玄関を入ると館内正面に華やかな階段が待ち受け、廊下の天井には織物を思わせる繊細なレリーフ装飾、また漆喰細工の照明飾りが豪華である。階段踊り場の半円形アーチ長窓には、やや時代を遡った明治初期の擬洋風建築に見られるような赤、青、緑の色ガラスが詰め込まれている。

この建物は、随所に装飾がちりばめられ、構内に残る他の工場建築と区別されることが目にも明らかである。しかし、車寄せの円柱の柱頭デザインを見ると、アカンサスの葉飾りの間に桜の花が組み合わされていること、ロココ的な屋根のグリルと白い古典系の本体とに様式的齟齬が感じられる。また、時代的には、もはやお雇い外国人技師の活躍する時代ではない。仮に、神戸を本拠に、京都でも同志社大学や平安女学院の建物を設計した英国王立建築家協会正会員ハンセル（Alexander Nelson Hansell, 1857-1940年）がこの本社屋を手がけたとしたら、装飾にいたるまで様式的な統一性を示すはずである。また、帝大出身者として初めて工場専門の建築家となった茂庄五郎であるならば、先に挙げた旧尼崎紡績本社屋のように、装飾を排し、無駄のない外観に徹するであろう。従って、京都綿ネル本社屋については装飾性が豊かではあるが、帝大で西洋建築の様式を学んだ建築家は関与していないと判断されるのである。

しかし、少なくとも、京都綿ネル工場群に日々出入りし、ヨーロッパもアメリカも知る藤村岩次郎には、同じ煉瓦建築であっても、装飾を排した機能本意の造形と芸術的な意図をもつ造形との区別は歴然としていたはずである。そして、衣笠会館附属棟の端にある茶室内の高価で凝った部材の選択を鑑みると、合理的、あるいは機能本意に徹することを好んだとも考えられない。次章において、衣笠会館の用途について総合的な推論を試みたい。

5 衣笠会館の作者と会館の用途

5-1 天井裏の調査と棟札発見

この建物は、100年以上の経年変化にも、震災にもゆるみの生じない、優れて堅牢な建物である。小口と長手を列ごと交互に積む、揺れに強いイギリス積みを採用しているというだけでは説明がつかないように思われる。明治期に建てられた関西の煉瓦建

築でイギリス積みであっても、ゆるみが生じたり、阪神淡路大震災の後に亀裂が走った事例は多々見受けられた。衣笠会館は、藤村の会社である京都綿ネル工場や本社屋を手がけた人物が施工したと考えるならば優れた耐久性、またその技術に反して西洋歴史建築の様式や装飾の文法に不案内なところが見受けられたとしても不思議ではない。

平成19年11月29日、論者は京都市文化財保護課技師・石川祐一氏立会のもと、衣笠会館の天井裏の調査を行った。調査の成果は以下の4点であった。

- 1) 棟札が発見され、「施主藤村岩次郎」そして「請負人鈴鹿彌惣吉」の名と上棟式の日付を明治37年10月11日と記した墨書が確認された(図2-1、2-2)。
- 2) 天井裏には2階北側に和室から洋室への改造を行った跡があり、洋間から和室への改造が検証された。
- 3) 小屋組は、和小屋でもなく、洋小屋でもなく、2本の梁で束をはさむ、という特種な小屋組であることが分かった。
- 4) 廃材も利用して始末をして建てていることが判明した。

この棟札の記載から、作者がイギリス人でもないこと、そして曖昧であった竣工年が判明するという大きな成果が得られた。この時代において「請負人」が意味する内容は、設計・施工一切を意味する場合からコーディネイトをする場合まで幅があった。ただし、棟札に「請負人」と記す場合は、施工をした棟梁を意味する。

次いで論者は、あらためて京都綿ネル工事記録写真(図8)をつぶさに点検したところ、工事中の記念写真中、最前列にいる人物の右から二人目と三人目の間、少し後ろにいる法被姿の人物が巻物を持ち、法被の胸に鈴鹿組と読み取ることができた。法被に染め抜かれた組の名は複数あったが、鈴鹿組の人物だけが図面らしき巻物を持っている。そこから、工事全体の設計者でないとしても、筆頭請負の施工者・鈴鹿組の棟梁であると判断される。大工場群の施工を行った経験をもつ棟梁であるならば、特別に設計者を他に頼らなくとも自ら衣笠会館を設計し、施行することができたのではないか。

藤村岩次郎から伝わる写真には仕事関係の人物の写真が多数あり、裏書きに名前も記されていたが、鈴鹿に関する写真は発見できなかった。この組、そして鈴鹿彌惣吉については、現在の建築業界からもめばしい情報は得られなかった³⁶。しかし、少なくとも明治、大正期には資材を運ぶのは大八車であったため、施工は近場の組が手がけるのが普通であったことから、鈴鹿彌惣吉は右京に在住の棟梁であったと判断されてよいのではないか。

5-2 調査の結果

論者が一連の調査から得た成果は、以下の5点である。

- ・衣笠会館の屋根裏調査によって、棟札を発見し、施主が藤村岩次郎であること、上

棟式が明治37年10月11日であること、そして問題の設計・施工については、「請負人鈴鹿彌惣吉」と記された棟梁の名が確認されたこと。

- ・鈴鹿彌惣吉は、京都綿ネル本社工場建設における筆頭請負の棟梁と推測されること。
- ・京都綿ネル本社工場の竣工年も従来不詳であったが、同社10周年記念写真帖、藤村家所蔵の工場建設写真から工場群は明治29年から31年にかけて、本社屋は39年12月に竣工したことが判明したこと。

- ・衣笠会館は施主が和洋折衷の住宅として建設したわけではない。また2階の洋間4室のうち北奥の2室、北東の1室は、大正末年から昭和初期にかけて施主の長男が住居とするために和室に改造し、西中央は、京都工芸繊維大学の所有になってから昭和40年代後半に和室に改造されたことが判明したこと。

- ・衣笠会館は当初住居ではなく、また本格的な木造平屋の「洋館」がこの煉瓦建築とは別に敷地奥にあったこと。屋敷全体の建造物構成が少なくとも、母屋としての木造平屋1棟、木造平屋洋館、煉瓦造2階建1棟（衣笠会館）および現在は片側に部屋を並べた廊下でつながれた蔵と茶室³⁷、敷地西奥の蔵からなり、緑豊かな庭園の中にそれらが点在していたこと。

6 おわりに

本論は、平成17年に登録有形文化財（建築物）に登録された衣笠会館について、いままで不詳のままに終わっていた設計者、竣工年を明らかにし、そしてこの建物の本来の機能を歴史的に検証することを目的とした。従来の、明治赤煉瓦の希少な住宅建築という通説を再検討し、本建築本来の機能を明らかにすることで歴史的な再評価につながると信じたからである。

施主の一族からの聞き取り、古写真の分析、京都綿ネル本社屋の現地調査、衣笠会館の屋根裏調査を通じて、この会館は明治37年10月11日に上棟され、棟梁は、京都綿ネル工場建設の筆頭請負人とおぼしき鈴鹿彌惣吉であることが判明した。ここに、最後の課題として、衣笠会館本来の役割についての考察結果をまとめたい。

まず、施主と施工者との関係については、藤村岩次郎は自邸の普請に先立って、会社の工場の工事を請け負っていた鈴鹿彌惣吉に自邸の洋館の建設を任せた。ただし、藤村家からの聞き取り、家族の人数や当時の住文化からして家族の住居として依頼したのではないために、堅牢であるがあっさりとした洋館となった。その用途については、基本にお屋敷のなかで応接スペースとして建てられた洋館の例に倣っていることは確かである。ただし、いかにも美しい迎賓館ではなく、内部の階段も控えめなものであり、敷地の奥には木造平屋の洋館が別にあったこと、一条通に面した表門から入ったすぐの位置にあることから、商家の「表屋」のように、住まいの奥座敷とは異なる種類の接客や会合にもちいた、事務所棟のような機能を担っていた建物であると考えてよいのではないか。

藤村岩次郎には、個人の屋敷の中、表通りからすぐ入れる事務所棟のような建物を設置する必要があった。なぜなら、藤村は、織物会社の経営だけではなく、隣接する賃貸住宅街「衣笠園」の経営、さらには自動車ほかの輸入も手がけたことから、合資経営の織物会社の社屋ではなく自邸内にも事務所を必要としたにちがいないからである。また、京都近代の繊維業界を中心に活躍し、衣笠一帯の近代を拓いた実業家であれば、西陣に近いこの屋敷には、公的な来客も多かったと考えるのが自然であろう。それには、贅を凝らした迎賓館のような造りでもなく、またお屋敷の洋館然とした外観でもなく、明治期にあっては公的な場をイメージさせ、かつ木造ではない堅牢な煉瓦建築がふさわしかったと主張したい。

注・参考文献

- 1 前久夫氏は建設当初から和風の生活を考慮した煉瓦造住宅と紹介しておられる。前久夫・日向進著『京都の赤レンガ』京都新聞社 平成9年、26-28頁。また、中川理氏は2階1室に和室への改造が認められるが、2階奥の和室の伝統意匠に破綻がなく、「京都市内に残るほとんど唯一といってよい明治後期の煉瓦造の住宅遺構として、きわめて貴重な存在である」と述べておられる。京都文化市民局編『京都市の近代化遺産—京都市近代化遺産（建造物等）調査報告書—近代建築編』平成18年、186頁。文化庁文化財部編『総覧 登録有形文化財建造物 5000』には種別として「住宅」と分類されている。海路書院 平成17年、241頁。
- 2 平成17年度～平成19年度にかけて科学研究費補助金の交付を受け「建築家・武田五一と京都近代の都市景観」（研究課題番号 17520093（基盤研究（C））という課題をかかげ市内の近代建築と都市景観の関係についての研究を行った。考察内容については平成20年3月の研究成果報告書を参照されたい。
- 3 論者の講演内容については「財団法人衣笠会ニュース」平成20年3月特別号を参照のこと。
- 4 機業家とは繊維業界の事業家を言う。
- 5 明治30（1897）年、衣笠会館より西方に位置する衣笠村大將軍坂田町に京都蚕業講習所（後に京都高等蚕業学校と改称）が設置され、戦後に京都工芸繊維大学繊維学部へ合併された。同学が衣笠会館を取得したのは、この地が京都における養蚕研究発祥の地であることが理由のひとつであったという。
- 6 ファンライト（Fanlight）は扉、窓上の扇形の明かり取り窓。
- 7 <改正京町御絵図細見大成> 慶応4年（1868）竹原文叢堂梓 木版 177x144cm. 『慶長昭和京都地図集成』柏書房 平成6年93頁所収。北野白梅町付近の部分を取り取り因州池田屋舗と大將軍社を丸で囲い、御土居と紙屋川を記入した。
- 8 北野-帷子ノ辻間の全線が開通したのは大正15年3月である。
- 9 石田潤一郎「『衣笠園』の形成 近代京都における住宅地形成（その2）」『日本建築学会近畿支部研究報告集』平成3年、809-812頁参照のこと。
- 10 日本近代の郊外住宅の開発については、片木篤・藤谷陽悦・角野博幸編『近代日本の郊外住宅地』鹿島出版会 平成12年を参照のこと。
- 11 阪神電鉄は大規模な賃貸住宅の、阪急電鉄は我が国最初の住宅ローン付きの分譲住宅地の開発を行った。手つかずの阪神間の土地に、阪神は海辺、阪急は山手に鉄道を敷設し、住宅から野球場、劇場、温泉などの娯楽施設、美術館、学校、ターミナルデパートまでを沿線につくり、近代文化の総合的なプロデュースを行った。

- 12 白川村が、格好の住宅用地としてにわか宅地として注目を浴びたのは大正末期のことであった。大正8年の第二次街路拡張計画にともない、今出川通の東への延長と市電の敷設、白川通新設が決まり、京都大学の理学部、農学部の北白川移転が始まったために、宅地開発や住宅販売の企業家たちの興味を引いた。ことに昭和4年に外務省管轄の研究機関が設置される予定が、高級住宅地としての期待を高めたに違いない。大正14年から昭和12年にかけて、繊維産業を母胎とする企業家・藤井善助（明治6-昭和16）の運営する日本土地商事株式会社が、京大関係者の購入を見込んで四期に分けて宅地分譲をした。
- 13 石田潤一郎著「《衣笠園》の形成 近代京都における住宅地形成（その2）」日本建築学会近畿支部研究報告集 平成3年度、809-812頁参照のこと。
- 14 「綿ネル」とは綿のフランネル（Cotton Flannel）の略語である。綿ネルは、布の毛羽立ちの工程を経ることで柔らかな肌触りで保温性にすぐれ、安価であるために明治期には軍服、庶民の下着や寝間着、防寒着に広く用いられた布である。京都は、機械捺染によって全国的なシェアを獲得するにいたった。
- 15 図6の始業式写真裏には「明治34年1月3日始業式」と墨書されている。京都における綿ネル業界の飛躍については、京都近代染織技術発達史編纂委員会編『京都近代染織技術発達史』京都市染織試験場、平成2年45-48頁を、また京都綿ネル株式会社草創期については、小川一真著『京都綿ネル株式会社 創業十周年記念写真帖』明治40年を参照のこと。
- 16 明治31年10月21日付、総理大臣大隈重信宛請願書には藤村が京都工業会社同盟会代表者として、また明治33年1月1日付、京都商業会議所会頭による欧米商工視察報告書には常議員として藤村岩次郎の署名が記されている。
- 17 日本写真印刷の敷地には、京都綿ネルの古写真と照合すると敷地北端の工場建築が確認される。建設現場写真（図7）の裏書きには明治30年6月8日とある。
- 18 稲津近太郎編『京都地籍図第三編』京都地籍図編纂所 大正元年 56頁以下掲載の葛野郡衣笠村の段ノ浦、五反田、河原畑、堂後などの田地、宅地多数の所有者名に藤村岩太郎の名が記載され、その住所として「元両替町」とあることから、衣笠村への転居前は、京都市下京区元両替町に居住していたと思われる。
- 19 旧藤村邸の屋敷内建造物の配置については、多賀子氏から聞き取り、論者が作図した。スケールについてはよく判断できなかったため、この図9はあくまでも建物の種類と位置関係だけを示す図式であることを断っておきたい。
- 20 図示した西端以外の蔵については正確な位置の聞き取りはできなかった。
- 21 付属棟は、会館の一階北端から廊下状で西側に部屋が並ぶ南北に長い平屋の建物、北端西に蔵、東に茶室、そして茶室の前には庭がある。
- 22 藤村多賀子氏の言で、いわゆる明治期の迎賓館としての洋館を思わせる外観の小さな木造建築であったとのことである。
- 23 お雇い外国人が法外な報酬をえて活躍したのは幕末から明治10年代末までであり、それ以降は、どの分野も日本人に置き換わっていった。彼らの活動については、梅溪昇著『お雇い外国人 明治日本の脇役たち』日本経済新聞社 昭和40年を参照のこと。
- 24 コンドルの建築作品については、鈴木博之監修『鹿鳴館の建築家 ジョサイア・コンドル展図録』補訂版訂版、建築画報社 平成22年を参照のこと。
- 25 日本近代の明治から昭和初期にかけての接客スペースとしての洋館については、藤森照信著『歴史遺産 日本の洋館』全5巻 講談社 平成14年を参照のこと。
- 26 テニスコートについては、設置の時代の情報は得られなかった。
- 27 建築家・横河民輔（元治元：1864 - 昭和20年）は、明治23年に帝大の卒業論文と卒業設計に下町の長屋を取り上げ話題となったことが知られる。横河の場合は、芸術としての建築よ

- りも、実用に帰す建築に興味があったといえる。事実、彼はその後、耐震の問題に取り組む。
- 28 大正8年に原敬内閣が初めて国民の住環境改善のために住宅法を制定し、都市住宅局を設置した。東京大学工学部建築学科教授・佐野利器(明治13:1880-昭和31:1956年)がその実施のために生活改善同盟を結成し、日本人の生活スタイルを畳生活から椅子座へ変化させ、住居を有機的に関連させて生活向上を図る運動を展開した。佐野利器『住宅論』文化生活研究会、昭和元年を参照のこと。また婦人運動家、民間の住宅会社も生活スタイルの一元化と健康的な住宅のモデルを模索した。
- 29 ふくやま美術館編・ふくやま美術館開館15周年記念展覧会図録『武田五一・田辺淳吉・藤井厚二 日本を意匠した近代建築家たち』平成16年、211-212頁。
- 30 長楽館は、たばこ王・村井吉兵衛(文久4:1864—大正15:1926年)が建築家ガーディナー(James McDonald Gardiner, 1857—1925年)に依頼した一種の宮殿建築であり、内部は部屋ごとにロココ様式、アールヌーボ様式などの調度と装飾で統一されている。
- 31 註1に挙げた中川理氏は、この和室については洋室からの改造としておられた。京都文化市民局編『京都市の近代化遺産—京都市近代化遺産(建造物等)調査報告書—近代建築編』平成18年、186頁。
- 32 建物本体に用いられている煉瓦(並煉瓦)が225x105x57mm.であるのに対して、改造とおぼしき箇所は、大正14年3月に日本標準規格(JES)に定められ、それ以降も日本工業規格(JIS)に継承されている210x100x60mm.の寸法であった。
- 33 木の柱と梁で建てる建物、すなわち日本の木造建築にたいして、古代ローマに淵源をもつ煉瓦造、石造建築は、煉瓦や石を積み上げ、扇形の部材を弧の形に組んで開口部を作る。梁を斜めにかけて屋根が軽い洋小屋組にすれば、広々とした柱のない不燃建築空間ができあがる。床も煉瓦敷きの防火床にするならば、さらに完璧な防火建築になる。このアーチとセメントを用いた建築技術は積層建築も円形建築もトンネルも構築できる。応用範囲の広い工法である。
- 煉瓦積みと石積みを比較すると、石は重たい。自然物であるために採石、加工、運搬に手間も経費もかかる。それに対して煉瓦の利点は、それに適した土を泥にしてこね、型で成型して焼成すれば、容易に、安価に生産できる。さらに、石より軽いために運搬や扱ひも簡単である。すでに、明治の初期の造幣寮や、琵琶湖疏水のような大事業の場合には直営の煉瓦工場で大量生産された。
- 34 西洋建築には正統としての古代ギリシア・ローマの神殿建築の流れがあり、外観が白っぽいこと、ドリス、イオニア、コリント様式のオーダーで飾られることなどを特色とする。それは、政庁舎、美術館、博物館、宮殿などに応用されてきた。ルネサンスから現代にいたるまで古典系建築は正統でありつづけている。
- 35 小川一真著『京都綿ネル株式会社 創業十周年記念写真帖』、付録1-8頁参照のこと。
- 36 明治35年に設立した京都府建築請負業組合の後身である京都府建築工業協同組合では戦後の記録しかないために、明治末期の事は調べるすべが無かった。また鈴鹿姓が、左京区の吉田神社宮司一族に固有の姓であることに着目し、神社に調査をお願いしたが、吉田神社の関係者ではないとの返答を得た。
- 37 茶室については、現在衣笠会館とつながっているが、茶室前の庭において踏み石が中途半端に会館の北で途切れていること、大きな敷地の中で、茶室は別個独立していたと考えるほうが自然であることから、部屋を備えた廊下のような平屋は衣笠会館が住居として改造されたときに設置され、茶室が離れのように機能したと類推されるが、この問題については稿を改めて考察したい。

